九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

平成12年度演習林年報

https://doi.org/10.15017/18594

出版情報：年報（九州大学農学部演習林年報）. 2000, 2002-03-29. 九州大学農学部附属演習林
バージョン：
権利関係：

はしがき

この「年報　2000　九州大学演習林」は，20世紀最終年度の九州大学演習林の諸活動を公表する年報である．それと同時に，「九州大学演習林」が発刊する「最終年報」にすべく，全力が傾注された．しかし，残念ながら，そのような記念すべき「最終年報」にはならず，その年報は21世紀に持ち越された．「九州大学農学部附属演習林」から「九州大学大学院生物資源環境科学府（大学院の教育組織）附属『生態圏フィールド科学教育研究センター』」（農場・水産実験所との統合体）への改組が，21世紀初年度の2001年度当初において実現しなかったからである．さらに，2002年度当初においても，その改組実現は不調に終わった．この一連の改組不成功の責任の一端は，その折衝の前面に立たされた演習林長にある．ここを借りて，演習林各位をはじめ，多方面の関係各位に深謝の意を表する．

頭を下げれば済む，という問題ではない．国立大学演習林を取り巻く諸情勢はきわめて厳しい．「生態圏フィールド科学教育研究センター」構想実現が不調に終わったからといって，事態が好転するまで，しばらく様子をみるような場合ではない．直ちに，新改組案の模索が，学内外にわたって始まった．その結果，演習林を中核とする学内共同教育研究施設としての「森林フィールド科学教育研究センター」への改組案が構築され，目下実現に向けて折衝中である．しかし，2004（平成16）年度から予定されている国立大学法人化を目前にして，学内事情はきわめて流動的である．大きな学内波にのみ込まれる危険性があり，演習林の独自性保持に危惧はある．座して死を待つに等しい対応は許されない．打って出て活路を見出すほかあるまい．

このような国立大学演習林を取り巻く難局に直面し，その打開策に没頭して肝心の約7,200haの所管林のことを忘れてはならない．彼等が「九州大学演習林」と名付けられて以来，最長老は2002年度をもって90年に達する．10月には，それを記念した式典が開催される．福岡都市圏・椎葉深山・十勝山里に別れて暮らす彼等は，日本列島に暮らすスギやヒノキ等の多くの仲間達が第２次世界大戦後の混乱期，その後の高度経済成長期には，主として「木材生産機能林」として働いていたことを知っている．最近では，海外で暮らしていたモミやトウヒ等の多くの仲間達が，種々の「木質材料」に変身して，日本列島の67％を覆うほどに多くの仲間達が暮らしているこの森林列島に，なぜか大挙して押しかけてくる不思議な現象も知っている．その現象とも関連して，日本列島に暮らすスギやヒノキ等の多くの仲間達が「多目的機能林」に転職した，ごく最近の出来事も知っている．もちろん，３地域に別れて暮らす彼等も同じ運命にあることは自覚しているはずである．しかし，「多目的機能林のなかには，かつて活躍した木材生産機能林も含まれている」という彼等の叫び声が３方から聞こえたような気がした．

九州大学演習林の改組にあたり，90年間の長きにわたって人間界の変遷をじっくり視てきた約7,200haの彼等の叫び声にも耳を傾けながら，どのような改組結果になろうとも，彼等を多目的機能林フィールド科学の強力な推進母体に誘導すべきである．

改組再出発の2002年３月

演習林長　　今　田　盛　生